

幼児期の学びの経験とTAPのつながり

—子ども主体の教育・保育の重要性—

Connecting Early Childhood Learning Experiences with Tamagawa Adventure Program:
The Importance of Agentic Education and Childcare

若月芳浩、岩田恵子

Yoshihiro Wakatsuki, Keiko Iwata

キーワード：幼児教育、主体的な学び、対話、冒険、まなびほぐし

Keywords：early childhood education, active learning, dialogue, adventure, unlearn

はじめに

幼児教育・保育については世界的な動向として、質的な向上が求められている。日本の幼児教育においては、平成29年に3法令が改訂（定）されたことにより、主体的、対話的で深い学びの重要性が就学前の幼児にとっても重要であることが共有され、その具現化を図ろうとしている。しかし、教育学部における幼稚園実習や保育所実習において学生の実習経験や、筆者が関係する幼稚園団体、または研修等で見聞きする実践を垣間見ると、改訂による方向性を具現化できていない園の姿や教育・保育のあり方、昭和の時代のまま繰り返されている実践を目の当たりにする。

そこで、本稿では、子ども主体の教育・保育を実現することの重要性と、TAPの理論や実践が幼児期の学びにどのようにつながるかを明確にした上で、今後の展望について事例を取り上げながら考察したい。

幼児期の子どもにとっての冒険とは

幼児は安心・安全の基地をベースにしながら、新たな事象と出会い、探求し、そして自らの世界を拡大しながら自らの力を知ると共に、新たな成果との関係を形成し、発達に必要な経験を積み重ねている。その際、幼児教育・保育の役割は幼児が自ら冒険することが可能な環境を整えると共に、幼児が挑戦したくなるような場や雰囲気醸成する必要がある。保育者は安全に十分に配慮した環境の中で、遊びを通じて心身共に重要な学びを経験し、その中で人間関係や新たな知識を獲得していく。そのことが人間形成の基礎を培うことになる。

しかし、安全第一主義の保育や、過去の伝統を踏襲して、幼児に何かを経験「させる」ことを教育・保育の第一義的な役割と指導であると考えている園の実践も多い。昭和の高度経済成長の中における第二次ベビーブームの時代に大規模化した私立幼稚園の認可や、昭和39年の幼稚園教育要領における「望ましい経験や活動」をいかに子どもに的確に経験させることが必要であるかといった、カリキュラム中心主義の教育・保育のあり方は、平成元年の幼稚園教育要領等の改

訂において、新たな知見が提示されたにも関わらず、なかなか浸透してこなかった経緯があることも否めない。さらに、幼児期には全くふさわしいと思えないような奇妙な教育・保育を売り物にして園児を獲得しようとする園が多くなっていることもあり、保護者にとっても何が本当に必要な教育・保育であるのかを迷わせ、煽るような状況も生み出されているのである。

以上のような経緯から考えても、現行の幼稚園教育要領や小学校以上の学習指導要領は、これからの時代を生き抜いていくために幼児期から重要かつ必要な新たな学びの方向性を確実に提示しており、それは世界的に共有されているものである¹⁾。このような情勢の中で、TAPには多大なる貢献の可能性があるだけでなく、今までの実践の中から幼児期の教育・保育や幼児期の教育・保育と小学校の学びを接続する意味や園相互が学び合うことの意義、さらには教員間における幼保小の接続、また教員研究におけるTAPがもたらす新たな知見の可能性を包含している。

幼児期の体験と卒園してからの学び

筆者が園長を務めているS幼稚園は横浜市の傾斜地にあり、現在140名程度の園児が在籍している。筆者は平成19年から園長を任され、教育・保育の改革に取り組んできて現在に至っている。10数年改革の経緯は以下のとおりである。

- ・ 行事中心の保育から、遊び中心の保育への質的な転換
- ・ 遊びの中にある学びをできるだけ重視し、子ども主体の教育・保育の具現化
- ・ 遊びや日常の中にある子どもの興味関心を活かした行事への取り組み
- ・ 自然のかかわりや戸外での活発な遊び環境を活かし、逞しい心と身体を育む
- ・ 保育者の園内連携を重視し、園全体で個々の子どもの育ちを大切にす
- ・ 障がいのある子どもなど、多様性を受け入れる教育・保育の実現
- ・ 地域の小学校や中学校との接続を意識した連携の重視等²⁾

上記だけではないが、子ども主体の保育を実現するためには、多くのハードルがあるだけでなく、教員間の共有や保護者の理解を求めることなど、多難な道のりがある。正にこの実現は園としての冒険でもある。しかし、それを乗り越えた先には大きな変革があった。それは何よりも子どもの育ちの変化である。筆者らがTAPから学びを得てきた経緯は、その真髄として多義的な変革につながるものが明らかになってきた。すなわち、保育が本当に子ども主体の学びに転換していくとき、そこでは、子どもを中心として、保育者、保護者、そして、地域の小学校という場でも、変容が生じてきた。そこで、幼児教育・保育の改革だけでなく、幼児の冒険心の醸成と保育の質的な向上、保育者の保育改革の方向性、TAP研修を通じての同僚性の向上などが連動して変容してきている。本稿ではその一部を事例として取り上げ、これからの学ぶ場の変容を考えていく際のTAPの可能性を探りたい。

事例1 幼児の育ちから見えてきた学びの連続性

園の改革に取り組む中、年長児の文字を学習するためのワークブックの廃止や専科の体育教師による体育指導の廃止、行事のために練習を積み重ねることの削減など、大人がさせることをできるだけ軽減し、子どもの「やりたい」ことを実現できる教育・保育に変更するプロセスの中で、保護者からは「今までの教育・保育の方が魅力的だった。」「日々の園での成果がよく分かった。」「行事が立派にできていた。」など園の改革の方向性について否定的な意見をもらう日々が続き、

その積みに追われていた時期もあった。しかし、改革の方向性はこれからの新たな教育・保育の方向性であると自負し、日々格闘する毎日であったが、保護者の理解と子どもの育ちが一致する時期が訪れた。

幼児期の経験が小学校4年生で開花

幼児期には、自分の好きなことには一生懸命になるが、苦手なことややりたくないと思える活動は場面を避けることが多く、担任としては今後の成長に不安を感じていたA君。保護者も常に心配していて就学を迎えた。横浜市では、就学する小学校との連携の中で、指導要録だけでなく、入学する学校の副校長や主幹教諭や養護教諭と個々の幼児についての情報交換をする機会を必ず設けている。そんな中でA君の申し送りではそのよさと難しさを伝え、小学校でも配慮が必要な可能性があることを告げて就学を迎えた。1年次、2年次はやはり心配していたとおり、好きな学習には取り組むが苦手なことが目の前で起きると教室から出ていくなど、いわゆる問題行動が指摘されていたA君。しかし、生活科や図工は大好きで、学びの中で、自分で探求したり、発表したりすること、また図工の作品の創造性などについては他の児童からも一目置かれていた。しかし、担任の教師からは、その偏りが常にマイナス面と指摘され、園にも数回担任の教師が相談に来ることもあった。

S幼稚園とS小学校は徒歩5分程度の立地であり、幼保小連携として、幼児と児童のかかわりや、教員間の研修や意見交換などが盛んになっている。そのような関係性の中で、A君は常に話題となり、かかわりの難しさや将来的な不安、学びの躓きなどネガティブな話題が中心であった。その後A君が4年生になり、担任が変わったときに情報交換を行う機会があった。園としても常に不安材料だけが届くため、卒園後も心配の尽きないA君であったが、転機が訪れた。

担任の教諭が、A君の発想の豊かさや物事に対するこだわりの強さ、また自身で目標を設定するとそれを実現するまで真剣に取り組む姿に感銘を受け、その素晴らしさを絶賛するのである。そんなとき、小学校との合同研修の機会があり、A君のことが話題となった。今まで否定的な話題が中心であったA君の素晴らしさや学びの方向性が話題となり、幼児期の経験と学びについて語る機会となった。その際、A君のことだけでなく、S幼稚園を卒園した児童が、探求する力や身体的な体力、また学びに向かう力がとても長けているとの話題となった。入学当初は着席が困難、話を聞くことが苦手など、学校にとってあまり好ましくない話題が多くあったが、成長すると共に、根底に秘めている力のすごさなどが話題になるようになったのである。

S幼稚園では、入園の際に説明会を実施し、遊びから生まれる学びについて保護者に説明をしている。さらに、可視化され難い状況については、写真や動画を活用し、幼児が何かに真剣に向き合うことの重要性やそこから生まれる学びについて丁寧に説明をしている。正に幼児が自己の拡大のために日々冒険することの意味や、その重要性についての理解を深めてもらっているのである。そのことは小学校の生活科や総合的な学習の時間などに接続していることがここ数年明らかになってきている。

事例1では、幼稚園を巣立ち、小学校で過ごしていくA君の姿が描かれている。そのA君の育ち学ぶ姿は、取り巻く関係、かかわりによって変容していることを中心に考察していきたい。

まず、幼稚園という場では、ちょうど保育が変革し、保育者が定めたワークブックや体操というカリキュラムが廃止され、子どもがやりたいことをとことん保障しようとする保育を試みてい

たところであった。そのような環境における保育は、保育者の挑戦であり、保護者に、その保育の意味を理解してもらうことが難しい日々もあったようである。しかし、とことんやりたいことを保障された日々の結果、A君は「できる」「できない」という軸で評価されるのではなく、苦手なことはもちろんあるものの、彼の「よさ」を基盤とした育ちの姿があることを、小学校に伝えてもらえるような幼稚園時代を過ごした。

しかし、小学校に入って、低学年のうちは、その幼稚園で培った彼の学びの基盤、発想の豊かさやこだわって粘り強く取り組むことを発揮している生活科や図工での姿が「見える」にもかかわらず、むしろ、そのときは「できている」のに、なぜ、他の科目で「できない」のかという視線にさらされている。同じ幼稚園から行った子どもたちの支えもあり、また、幼稚園と小学校のこまやかな連絡はあっても、小学校の担任教師のまなざしが「できる」「できない」にあると、彼の「よさ」は見えず、学びの基盤としてのつながりが見えてこない。

ところが、4年生の担任の先生は、幼稚園とも連携をとりながら、A君の「よさ」、そしてそのほかの児童の「よさ」も発見し、学びを広げ深めている。

このようにA君の彼らしい学びは、周りを取り巻く人々、環境によって保障されたり、されなかったりしている。A君は「気になる子ども」という特性を持っているから対応に困る子どもというわけではなく、周りのかかわりのありようで、A君らしくあることが可能であったり、難しかったりしているのである。

このようなA君の学びや育ちの見え方に象徴されるように、子どもたちの学びは、保育者、教師、保護者の今までの見方を変えようという挑戦からもたらされるように見える。つまり、子どもに「挑戦させる」ものではなく、かかわる大人が「挑戦する」ものである。そして、このようなかかわりあいの中で、子どもたちの遊びや学びは、自然に挑戦するものになっていくのではないだろうか。また、このような大人の挑戦を支えているのは、幼稚園における子どもたちの日々の小さな挑戦、すなわち学びの姿を写真や動画などを用いて保護者や小学校の教員と共有する対話が基盤になっているように捉えられる。

事例2 S幼稚園における4園合同研修

保育の質的な向上を図るために、教育・保育現場では研修の重要性が強調され、資質向上を具体的にどのように実現する必要があるかについて、自治体や団体組織だけでなく、実践を担当する保育者にも課せられている。そんな中、S幼稚園の他3つの園とオンラインにて合同研修を実施することとなった。その経緯として、4園の中核になっている担当者全員が玉川大学の卒業生であるだけでなく、ほぼ全員が学生時代にTAPを経験している。その経験から、教育・保育の新たな知見を自身の学びとして深めたいとの要求が一致し、研修を実施することとなった。今年度から始まった合同研修では、各園が事例を提案し、今までの教育・保育のあり方から一歩踏み出している事例や情報を交換し、その後対話を積み重ねる形式で実施されており、非常に学びの多い研修である。

S幼稚園は、2年前の運動会と今年度の運動会の内容やプロセスの変更や子どもの育ちについての提案を行った。

提案内容 運動会からスポーツフェスティバルへ

2年前の運動会の競技内容

【年少】 かけっこ・表現・玉入れ

【年中】 かけっこ・表現・色とり

【年長】 かけっこ・組体操・綱引き・リレー

【そのほか】 交流競技・園児家族の大玉送り …etc

・年少、年中の表現（ダンス）は流行っている遊びから行った。例えば、年中は、夏休み前に花火大会が流行ったことから子どもたちと身体で花火のイメージを共有して振りつけを考えた

今までの運動会への違和感

- ・表現は遊びからであるはずなのに、玉入れや色とり、組体操などは毎年恒例となっている。昔からの名残で残っているのではないか。
- ・日常の保育では遊びを大切にしているのに、急に運動会となる感じがすごくしている。
- ・子どもたちも楽しそうではあるけど、こちらからのやらせ感があるなあと感じてしまった。

名前を運動会からスポーツフェスティバルに変更

- ・保育者も保護者も「運動会」という概念をなくして、普段の「遊び」の様子を「楽しんでいる姿」を見てもらうことになった
- ・子どもたちを見るだけでなく保護者も一緒に楽しんで欲しい

【年少】 親子ダンス・だるまさんのいちにち

【年中】 親子ゲーム（三輪車）・箱タワーゲーム

【年長】 虫かごゲーム・親子でハンターゲーム・リレー

スポーツフェスティバルに変えてみて…

子どもたちの好きな遊びを取り入れてやってみた結果…

保護者からは様々な意見があった。例えば、かけっこが見たかった、子どもたち楽しんでいた、組体操はなくなっちゃったけどリレーはあってよかった、名前がスポーツフェスティバルなのにスポーツしてない、親はゲームに参加しなくもいい、など。

今年はどうする？

今年も子どもたちの好きな遊びを取り入れたい！

でも保護者からの意見も取り入れたい！

それぞれでクラスのカラーが違ったり、遊びの流行りも違うことも悩みのひとつだった

1学期の様子から年中では…

野菜栽培して料理してみた経験

鬼ごっこが好きな子どもたち

学年でやったドンじゃんけん

振り返りと来年に向けて

コロナ対応で、学年開催だったこともあるが、アットホームな雰囲気で行えたことがよかった。子どもの今の姿・保護者の要望・他学年との内容をバランスよく取り入れることが難しい。去年のプログラムの内容と似てしまう。子どもたちの「今」の遊びの姿から行事を考えていくことが大切。

以上のような提案を各園が展開する中で、自園だけでは気づくことが難しかったことについての発見や、今まで常識的に実施してきたことに対する疑問などが浮かび上がり、教育・保育のあり方に新たな方向性を生み出す可能性が生まれた。教育・保育現場の実践において、各園には伝

統や文化があり、その中だけで教育・保育が実践されている場合には、固定化した日々のルーティーンが多くあるために日々の保育に追われることも多く、新たな文化を創造することが難しくなってしまう可能性が高い。

事例2では、保育の質の向上を目指して、他の園と事例を語り合うことが行われている。保育を変えたいと望み、実際に、子どもが主体的に学ぶ保育の営みを支えているのは、今までの見方を変えることによる大人の挑戦が大きいことを事例1で見えてきたが、そのような一歩踏み出す挑戦を支える対話の別のありようを、ここでは見ることができる。すなわち、他の園と保育の具体的なエピソードを語り合うことによって、日常の保育で、取り組んでいる挑戦の意味が、保育者それぞれに、より深く見え、挑戦を継続することを可能にしていると捉えられる。

また、この事例2では、「運動会」という従来の「型」で捉えられやすい行事を変えていくという挑戦が語られている。行事は、子どもの育ちが見えやすい場面として、「年長になったらこれができるようになる」と保護者も期待していることも多く、変えるのに大きなエネルギーを必要とする。しかし、幼児の主体的、対話的で深い学びのありよう、子どもたちが遊び込んでいくことが日常で大切にされた際、従来の運動会では、違和感のあるものとなる。

そこで、ここで日常の保育から生じてきた行事のあり方を変えるという挑戦は、今までのどこかやらせてしまっている運動会から、日常でも大切にしている子どもたちの声、子どもたちとの対話を軸に、好きな遊びから運動会を作っていくことである。保育者たちは、今までの保護者が考えている運動会ではなく、子どもの声を選択するという大きな挑戦をしている。その挑戦は、保護者のイメージや要望とずれるところもある。しかし、子どもの学びを考えていったとき、子どもと一緒に考えていくことの大切さと、そこから生まれてくる学びの手応えが、さらに保護者にもその学びを理解してもらいたいと願う挑戦にもつながっていく。

また、この日常を大切にしている運動会のあり方自体が、似たようなものになってしまうという懸念は、そこからまた、日常の遊びのあり方を改めて考える機会にもなっていくと捉えられる。つまり、日常の学びをより深く考える機会としての行事が見えてきている。

事例3 幼保小連携と学びの変化

事例1でも記述したが、S幼稚園とS小学校は日常から連携を深め、互いに学び合う機会を重視している。コロナ禍となり、以前のような交流は減少しているものの、機会ある度に校長・副校長などとこれからの教育・保育のあり方などについて語る機会を大切にしている。3年前に就任した校長は、幼児教育に深い興味を示しており、園の行事に大変積極的に参加する機会を持ってくださった。特に園の行事の中でも「作品展」にはK中学校の校長も参加して下さり、幼児期からの遊びを通じての学びが如何に後の学びや学習につながる可能性があるかについて考える機会を持ってきた。そのような中で、S幼稚園の作品展は、以前は造形活動を中心にしてきたが、ここ数年は遊びの中にある学びを中心にドキュメンテーション型の展示を心がけてきた。作品だけを見るのではなく、子どもの発想の豊かさや、子どもが実現したいことがどのようなプロセスを経て実現へと向かうかなど、幼児の認知能力だけではなく、非認知能力、社会情緒的能力を醸成する日々の遊びや経験に目を向ける機会となっている。そのようなことも契機となり、小学校における学習指導要領が改訂され、小学校でも学びの方向性を見直していくことが重視されて始めた。

令和2年度と令和3年度の運動会のある場面を例にあげたい。コロナの影響もあると思われるが、運動会の種目を新たに刷新し、児童の意欲を重視した運動会が実施されるようになった。教師主導で「教える」運動会から、児童主体で対話を通じて実現する運動会に大きく舵を切ったのである。応援団の応援の方法などをクラスで話し合い、クラスのカラーや個性が確実に表現されており、明らかに学びの方向性が転換されていた。その一端には幼児教育の影響があり、年長児が話し合う姿や、遊びを通じて学び合うドキュメンテーションなどから刺激を受け、幼稚園児がこれだけ自分たちで物事を決定し、実現する力があることをしっかりと理解していただき、その成果を小学校につなげることの重要性の理解から、小学校でも学びの方向性を刷新するに至った経緯がある。横浜市では、幼保小連携の重要性については、30年近く前から研究と実践が積み重ねられているが、ともすると交流のみになってしまい、最も重要な学びの連続性についてはなかなか難しい状況もあった。しかし、接続期カリキュラムについて、具体的な交流があることによって、新たな知見が生まれることが今回の事例から明らかになった。

新たな知見を生み出すことの重要性は理解できていても、それを具現化することは容易ではない。しかし、具体的な連携や子どもの姿を通じて教師・保育者相互が学び合うことによって、幼児期から児童期までの学びの接続を実現することが可能となるのである。このようなことを実現するプロセスは、正にコンフォートゾーンから抜け出し、新たな冒険に取り組むことによって生み出されることではないだろうか。

事例3では、小学校での運動会が、児童たちとの対話で実現するものによって変わったことが取り上げられている。事例1で見ることができた幼稚園と小学校の対話、そして、事例2での幼稚園での運動会のありようの変化はもちろん、日常の子どもたちの声を大切にされた学びの姿を可視化したドキュメンテーションが、小学校自体の取り組みの変容につながっていったと捉えられる。新たなことに挑戦するということが、地域で共有されていく姿勢になっていくことは、子どもの育ちや学びを支えるだけでなく、子どもの育ちや学びが、このような地域の文化を作っていくように見える。

ここで興味深いのは、いずれも、子どもたちを「変えた」から変わったのではなく、子どもの声、子どもとの対話を大切にするという、大人の側の枠組みが変わるという挑戦から、この実践が広がっていったという点である。つまり、子どもが新しいことに挑戦する、チャレンジするのは、子どもが変わるように励ますことから生まれるのではなく、まずは、子どもとかわる大人が、子どもの可能性を信じ、子どもと共に考えていくことに挑戦することが、大切であると捉えられる。

事例4 H幼稚園のTAP研修の積み重ねから

H幼稚園は18年前からTAPの公開講座をきっかけに、毎年のようにTAPの研修を園全体で受けており、多大なる成果を上げている。園から1人から2人の保育者が研修に参加することはしばしばあるが、園としての研修を毎年実施しているケースは多くない。その中から、毎年実施することの重要性とその成果について副園長にインタビューをさせてもらった。この事例から、今後のTAP研修の幼児教育・保育における可能性を明確にしたい。

研修の実施方法は、玉川学園に来てもらう形式とTAP担当者が園に足を運ぶケースなど様々である。当該園の園長・副園長がTAP研修で育まれる保育者にとっての学びの大切さを痛切に

実感し、可能な限り毎年の実現を目指してきたとのことである。その中で成果について、以下のとおり整理する。限られた紙面のために若干割愛する部分もあるが、大切な研修成果を共有することで、幼児教育・保育への示唆を確認したい。

○保育者のチームとして

- ・全員が自分の思っていること、考え、感じたことなどを伝え合うことが必要だという意識が浸透し、実際に伝え合うことができるようになってきた。経験年数に関係なく、若い人の意見もものすごく大事で、チームとして成長していくためには必要だということが、ベテランの先生が本当に思えるようになり、若い先生が発言しやすい雰囲気を作ってくれるようになった。そういう雰囲気の中で、1、2年目の先生も発言するようになった。
- ・保育業務に関して、低かった時間への意識が高まり、保育後の業務について時間をしっかりと意識して行えるようになってきた。これはなかなか難しいが、つい長くなってしまふ子どもたちの話や保育の話、長ければいいというわけではないという意識も持てるようになった。
- ・教育者である前に「人としてどうなりたいか？」という視点を持つことができ、またそれが保育に生きてくるということを感じて、自分磨きを意識するようになった。
- ・自分の力を100%出しているか？

若い先生たちにとって、例えば力量を数字で表したとき、園長は1,000、副園長は800、主任は500、自分（新人）は100だとしたら、私は100しかない…という思考ではなく、自分の持っている100をすべて出しているか？ということが大事だと意識できるようになり、仕事への取り組み方が変わった。

○子どもたちに対して

- ・上から押しつけるのではなく、ファシリテーションとしての意識が芽生えて、一人ひとりへの支援の仕方には違いがあり、考えていくようになった。

○個人として

- ・自分の特性を突き付けられ、自分で考える自分の強み、弱み等をチームみんなで共有しているので、チームみんなの相手理解につながり、弱みをカバーしあったり、強みに頼ったり、結果チームとして、レベルアップし、仕事の効率が上がったり子どもたちの生活の豊かさにつながっている。

以上のように、新たな気づきと学びが多くあり、保育の実践に対する質的な向上にも多大なる影響を与えるだけでなく、何よりも同僚性の高まりが強く感じられる。

事例4は、園長をはじめ全教員でTAPの研修を行っている園の声である。TAPを経験することで、伝え合うことの重要性、どの意見も尊重すること、それぞれの強みを活かしあったり、弱みをカバーしあったりすることが体験され、日常保育を行う上でのチームワークが向上することが語られている。そして、何より大きいのは、そのような教員間のチームワークができてくる中で、子どもたちとのかかわりも、そのような対話、すなわち子どもの声を大切にすることが意識されたものになっていっていることである。

事例1から3に見てきたように、子どもたちの挑戦からの学びが広がり深まる際に重要である大人の側のものの見方の転換、そして、そこへの挑戦に際して、園の教員がチームでTAPを経験することの意味が見えてくると捉えられる。

TAP研修と幼児教育の質的向上

筆者は、以前、TAPは、「まなびほぐし」の場のひとつではないかと述べた³⁾。「まなびほぐし」とは、鶴見俊輔が、戦前、ニューヨークでヘレン・ケラーに出会った際、「私は大学でたくさん、のこをまなんだが、そのあとたくさん、まなびほぐさなければならなかった」と語られたことに由来している。鶴見はそのとき初めて聞いたunlearnという言葉から、「型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景」を想像したという。鶴見はさらに、大学でまなぶ知識は必要だが、覚えただけでは役に立たず、それをまなびほぐしたものが血となり肉となるのであるとしている⁴⁾。佐伯(2012)は、この「まなびほぐし」こそが、いつのまにか身につけてしまっている「まなびの型」、さらには「学校教育」への過剰適応、「教えられグセ」からの脱皮の鍵だとしている⁵⁾。本論で見てきたように、現在の保育の課題となっている、幼児の主体的、対話的で深い学びを支えるには、個人が資質・能力を身につけるという従来の「まなびの型」を破る挑戦、「まなびほぐし」が必要であると捉えられる。

本論で見てきた事例にあるように、保育の場においてこのような「まなびほぐし」が生じるのは、子どもがそもそも主体的な学びをしている存在であることに、大人が気づき、そのようなかわりに変えていく挑戦が生じたときであった。子どもたちの学びがひらかれていくとき、重要であったのは、そこにかかわる大人の学びがひらかれていくことであった。つまり、従来の「できる・できない」の枠組み、資質・能力を身につけさせる「まなびの型」を変えるという挑戦が必要なのは、大人である。

また、大人が、そのようなひらかれたまなびに気づいていくには、TAPのキーワードである、アドベンチャーという未知なものへの挑戦が鍵となっていたと捉えられる。従来の「まなびの型」であれば、未知なものは大人にとっては存在せず、子どもが知らない、できないことを伝えるのが教育という営みになってしまう。しかし、ひらかれた学びでは、子どもと共に、大人も未知なものに臨む必要がある。未知なものに臨むのは、不安や葛藤も伴う。しかし、その未知なものへの挑戦が、学びがひらかれていく鍵になるのである。

保育の場では、この挑戦を、日々、子どもとともに行っていくことができる。子どもと対話し、共に身体を動かし、新たな学びをひらいていくのが子どもの主体的、対話的で深い学びを目指す保育の場で生じていることだからである。このような日常の保育の営みは、保育者同士の関係性に支えられる。事例4で見られたように同じ園の中での日常の対話は、保育者自身もお互いのよさを活かしあえるような関係を作っていくものである。また、その対話のありようが、TAPの経験で見直されている。さらに、事例2で見られたように、同じように保育をひらいていきたい複数の園での対話が学びをひらいていくことを支えることもある。また、事例1や事例3で見られたように、幼稚園の教員、小学校の教員、保護者の学びも子どもを中心においた対話から、重なり変容していく。

保育の場にまなびがひらかれていく鍵として、TAPのキーワードである挑戦について、さらに検討していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) OECD（経済協力開発機構）編著、星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子訳『OECD保育白書—人生の始まりこそ力強く—乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較』明石書店、2011年

- 2) 田澤里喜・若月芳浩『保育の変革期を乗り切る園長の仕事術—保育の質を高める幼稚園・保育所・認定こども園の経営と実践』中央法規出版、2018年
- 3) 岩田恵子「『まなびほぐし (unlearn)』としてのTAP」『TAPセンター年報』第5号、2019年、pp. 13-15
- 4) 鶴見俊輔「対談の後考えた—臨床で末期医療見つめ直す」朝日新聞、2006年12月27日朝刊
- 5) 佐伯胖「『まなびほぐし (アンラーン)』のすすめ」荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップと学び
1 まなびを学ぶ』東京大学出版会、2012年、pp. 27-68